

第 六 回

中学生訪中親善使節団報告書

1997年 3月25日～ 4月 1日

目 次

I 団員名簿	1
II 日 程	2
III 使節団の活動状況	3
IV 感想文	9

高松市中学生訪中親善使節団団員名簿

団 長	蓮 井 宣 昭 (男)	(財)高松市国際交流協会事務局長
引率教員	鬼 無 教 之 (男)	高松市立一宮中学校教諭
”	村 井 智 子 (女)	高松市立玉藻中学校教諭
”	詫 間 弥 生 (女)	高松市立屋島中学校養護教諭
団 員	香 西 美 知 (女)	高松市立桜町中学校
”	重 川 祥 (男)	高松市立桜町中学校
”	笠 井 聡一郎 (男)	高松市立紫雲中学校
”	吉 永 香 織 (女)	高松市立玉藻中学校
”	大 西 健太郎 (男)	高松市立光洋中学校
”	稲 毛 慶 太 (男)	高松市立城内中学校
”	武 田 知 夏 (女)	高松市立鶴尾中学校
”	溝 渕 悠 理 (女)	高松市立屋島中学校
”	向 井 紀 代 (女)	高松市立協和中学校
”	久 保 友香理 (女)	高松市立龍雲中学校
”	大 前 佑 花 (女)	高松市立勝賀中学校
”	藤 原 新太郎 (男)	高松市立一宮中学校
”	角 本 彩 (女)	高松市立香東中学校
”	生 南 佑 美 (女)	高松市立下笠居中学校
”	福 井 あかね (女)	高松市立男木中学校
”	田 中 正 剛 (男)	高松市立山田中学校
”	仙 波 幸 恵 (女)	高松市立太田中学校
”	中 村 仁 (男)	高松市立古高松中学校
”	松 岡 恵 美 (女)	高松市立古高松中学校
”	松 下 弥 生 (女)	高松市立木太中学校
”	矢 島 果 那 (女)	香川大学教育学部附属高松中学校



日 程

1997年3月25日（火）～ 4月1日（火） 8日間

日次	月日	交通機関	時 間	主 な 日 程	宿 泊
1	3/25 (火)	ANK468 リムジンバス CA922	10:25 11:05 11:30 12:50 15:35 20:05	高松発 伊丹着 伊丹発 関西空港着 関空発 北京着	北 京 新万寿賓館
2	3/26 (水)			万里の長城見学 明の十三陵・頤和園見学	同 上
3	3/27 (木)	CA1511	15:30 17:30	午前：天安門広場、故宮見学 午後：中日友好協会表敬訪問 北京発 南昌着	南 昌 友好会館
4	3/28 (金)		9:00 10:00 14:00 17:30	八一起義記念館見学 南昌第三中学校訪問・交流 昼食 南昌第三中学校で交歓会 南昌市人民政府表敬訪問	南 昌 友好会館
5	3/29 (土)		8:30 14:00 15:20 18:00	中日友好会館・滕王閣見学 八大山人記念館見学 少年宮訪問 市友協歓送会 団員生徒はホームステイ	南 昌 ホームステイ (引率者は会館)
6	3/30 (日)		9:20 11:00 12:10	南昌市内出発 南昌発 上海着 上海明珠タワー・動物園見学	上 海 日航龍柏飯店
7	3/31 (月)		午 前 午 後	豫園・玉仏寺見学 上海博物館見学	同 上
8	4/1 (火)	CA921 ANK723	8:30 11:15 14:05 18:15 18:50	ホテル出発 上海発 関空着 関空発 高松着	

※ANK：エアニッポン CA：中国国際航空

※中国での時間は、北京時間（日本より1時間遅い）で表示

使節団の活動状況

3 / 25 (火)

・高松ー北京

暖かい朝、10時に出発式を終え、多くの方々の温かい見送りを受けて、全員元気に中国へ向け出発。関西空港から2時間足らずで上海到着。入国管理官の厳しい目を見て、改めて、日本の外だと言うことを実感した。時計を1時間戻す。同じ飛行機で北京へ到着。機内で中国国際航空のステュワーデスに「櫻桃小丸子」を好きかと尋ねられ、「ちびまる子」は中国でも人気があることがわかった。空港では、南昌市外事弁公室の黄小燕さんと旅行社の高さんがにこにこ笑顔一杯で私たちを迎えてくれた。午後9時を過ぎてはいたが、レストランで初めての中華料理。ただ、2度も機内食を食べていたので、食欲は今一つという団員も。10時半、やっとホテルに到着。とても豪華なホテル、その名も“Grace Hotel”。

3 / 26 (水)

・北京

北京の朝の風景。広い道路を満員の通勤バスと自動車が警笛を鳴らし続けながら走って行く中をとにかくたくさんの自転車が駆け抜けて行く。北京は今、建築ラッシュと



期待と不安を胸に出発

言うことで至る所で建造中の建物を見ることができた。高層ビルと昔からの煉瓦の家が共存する町である。道も広いし、柳、アカシア、ポプラ、松の街路樹が見事であった。ただ、今は新緑の季節の前ということと、工事中の建物が多いという事で北京を砂埃の多い町にしていたようだ。程なく、頤和園に到着。あの「ラストエンペラー」に登場する西太后が別荘としていた庭園ということで、昆明湖という湖を取り入れた夏の宮殿の贅を尽くした作りに当時の西太后の絶大な権力がしのばれる。

その後、明朝皇帝の13人の陵墓を見学。中の1つの定陵を見学した。すべて大理石で構築された地下宮殿の大きさと豪華さに目を見張った。

おいしい中華料理を堪能した後、初めての円から元への両替で楽しく買い物をした団員も多数。

さて、今回の中国訪問の楽しみの1つである万里の長城見学。世界の7不思議の1

つであり、「月から見える唯一の建造物である」というのが素直にうなずけるほどの壮大なものであった。天候に恵まれ、コートを着ていると汗ばむほど。外国人観光客も多い。

夕食は、清時代の宮廷の女性を思わせるチャイナドレスのウェイトレスが北京ダックの食べ方を教えてくれて北京料理を満喫。

3 / 27 (木)

・北京－南昌

ホテルのバイキング料理も要領良く取れるようになった団員たち。朝のラッシュの人、自転車、自動車とともに北京の中心へとバスは進む。宇宙にある一番安全な入り口という意味の天安門。その前の天安門広場の「香港返還まであと97日」という大きな電光掲示板が今の中国の大きな関心事の1つである「香港」を思い出させてくれる。

とにかく広い、人の多いところである。広さは、44万㎡とか、広いはずである。たくさんの人の流れと共に故宮へ。たくさんの門をくぐり、60以上の殿閣が建っているといわれる敷地であるが、今日はどうやら外国の要人が来るとかで警備が厳しかった。交通規制も厳しく到着が1時間近く遅れたにもかかわらず、中日友好協会では、王慶英理事がにこやかに迎えて下さった。旧ソ連の大使館の建物という協会の静かな一室で、とてもお上手な日本語で歓迎の言葉をくださり、初めての表敬訪問という公式行事の大きな意味が団員全員にしっかりつかめたようだ。「日本と中国の若者が互いに理解し協力し合って次の時代を担っていく」事の大切さを忘れないようにしたい。

2日間お世話になった旅行社の高さんに北京空港で別れを告げ、南昌へと飛ぶ。



北京ダックを初めて食べる

午後6時南昌空港に到着。思いもかけず雨。高松・南昌友好会館の館長であり、南昌市の外事弁公室副主任の張知明女史が出迎えてくれた。また、明日訪問する予定の第三中学校の副校長先生と生徒も出迎えてくれた。みなさんの温かい歓迎の心がとてもうれしい。

昨年完成した高松・南昌友好会館に7時過ぎ到着。おいしい歓迎の食事が待ってく



長い長い万里の長城で

れていた。突然食事中に南昌の劉市長が登場、別室での会合に参加していたそうだが我々の事を聞いて、歓迎に来てくれたらしい。うれしいハプニングに大感激。



3 / 28 (金)

・南昌

朝、八一記念館を見学し、南昌市の歴史的な役割を学んだ後、いよいよ今回の訪中の最大の目的である南昌市の第三中学校を訪問した。幸い、昨夜の雨は小降りになったようで、一段と鮮やかさの増した緑と白い校舎のコントラストがすばらしい。バスから校舎までの両側に生徒たちが花束を持つての「ファンイン、ファンイン」の大歓迎に団員たちは大変感激した。曾愛華校長の歓迎の言葉の後、我々の自己紹介。高松で特訓したあいさつの練習の成果はばっちり、みんなとても上手。向こうの生徒たちは、とても流暢な英語での自己紹介。みかんの皮をむいてくれたの歓迎、ちょっと戸惑ったけどうれしかった。校舎を案内してくれる時には、手をつないで仲良く話している姿もあちこちで。

熱烈歓迎！

昼食は、先ほどの生徒たちも友好会館で一緒にするという事になって、楽しいものになった。

午後からは大きな階段教室での大交歓会となり、第三中学校の生徒たちの歌、踊り、

楽器演奏、書道など古典的な物から現代的なものまでのすばらしい出し物に、我々も練習を重ねた、「花」の二部合唱、各班の歌、踊り、リコーダー演奏、また揃いのハッピーを着ての高松おどり、中国語の歌「娃哈哈」で力いっぱいお応えした。



中国語で自己紹介

夕方、南昌市人民政府表敬訪問となり、教育担当の劉運来副市長に温かい歓迎を受けた。ここでもだいぶ慣れた、中国語での自己紹介。

南昌市主催の夕食会では、劉副市長をはじめ、陳中諱副秘書長、劉校長など南昌市の要人が出席して下さり、色々な理由で一度は中止になっていたホームステイがみなさんのご尽力で急きょ行われるという決定がその場でなされ、この旅行中一番うれしい食事となった。

3 / 29 (土)

・南昌

朝、友好会館の見学を行う。和室、日本の庭園、高松市の紹介コーナーなどを見て、さぬきうどんを思い出した団員もいた。その後、江南三大楼閣の一つである滕王閣を見学。すっかり晴れ上がり、滕王閣からの眺めは抜群。南昌が水の豊かな緑の潤いある都市だという事がよくわかった。桜はもう散って葉桜に。高松では桜が咲き始めたころだろう。やはりずいぶん暖かい。昼食の後、明の最後の皇帝の弟という書家であり、画家である風流人の八大山人の記念館を見学。南昌市といっても郊外に位置するため、あたりの農村の様子はさながら日本の数十年前のよう。再び市の中心に戻る。土曜日という事もあり、町で初めてたくさんの子供を見かけた。一人っ子政策というだけに両親に手をつながれた着飾った子供たちも多い。その一番にぎやかな一角に少年宮がある。子供たちは、歌、踊り、絵画、書道、チェスなどの特別指導を受けている。日本語で「おぼろ月夜」を一緒に歌ったグループの澄んだ声、表情豊かに躍る小学生たちが印象的。またその子たちを編み物をしながら待つ母親たち。どこの国も同じだと感じる。



八大山人記念館にて

南昌市外事弁公室主催の夕食会。通訳の黄さん、張館長さんらの上司である主任の李芸女史を迎え、団員たちもこれから出発するホームステイの話で興奮気味。1日のうちに快くホストファミリーを引き受けてくれた家族のお迎えで、午後8時、団員たちは友好会館を後にしていく。

3 / 30 (日)

・南昌－上海

午前8時30分、団員たちはみんな笑顔でホームステイ先の家族の人たちに送られてかえってくる。おみやげをいっぱい手にして。また友好会館の庭での記念撮影も大忙し。別れる直前まで語り合っているグループ、また第三中学校で披露した歌を踊りながら一緒に歌っているグループ。どこの家庭でも大歓迎を受けたことがうかがえる。

前夜から会館に泊まり込み、ホームステイの対応にあたってくれた第三中学の尚先生も南昌空港まで見送って下さった。そして、北京空港に着いた時からずっと6日間

私たちと同行してくれて、通訳だけでなく本当に色々な事でお世話になった外事弁公室の黄小燕さんと再会を固く約束して上海行きの飛行機に乗り込む。

今度は友好会館の館長さんの張女史の同行のもと、1時間あまりで12時過ぎに高層ビルの林立した上海に到着。ガイドの朱さんの案内でまず食事。上海料理に舌鼓。その後ホテルでチェックイン。

午後、玉仏寺見学。ミャンマーから送られた体長96cmの白玉の涅槃像のほほえみが世界の平和を願っているようだ。日曜日ということもあってか参拝の人は絶えない。

午後4時、高さ468mの東洋一（世界3位）の上海明珠タワーを見学。展望台からの360度の眺めは最高。さすが中国最大の経済都市と言われるだけはある。



楽しかったホームステイ

3 / 31 (月)

・上海

早起きをして、上海動物園へパンダの京々と川々を見に行く。パンダは昼間はほとんど寝ているので、朝のほうで食事をしたり遊んだりしているのを見られるからだ。日本だときっと許されない写真撮影が許されており、パンダには申し訳ないけど団員たちは大喜びでパンダを撮影。その後落ち着いて朝食となった。その後は、上海豫園見学。明代の高官がその両親のために造ったといわれる2万㎡の名園である。中は贅の限りを尽くしたものであるが、すぐ近くには物乞いもいた。貧富の差の激しさに心を傷めていた団員もいた。

昼食後、最後に本当にすばらしいものを見た感じにさせてくれたのが上海博物館であった。この新しい博物館は、中国の4000年前からの出土品から現代までの美術品点など10万点を展示している。到底1～2時間で見られるものではないが、団員たちもそれぞれ自分の好きなジャンルを見てまわっていた。なんだか別世界にいるように、中国の歴史の重さがずっしりと伝わってきた。上海最後の日なのでおみやげをいっぱい買ってホテルへ帰還。



上海明珠タワー

4 / 1 (火)

・上海－高松

ホテルの近くのレストランで朝食。後は上海空港から関西空港へ2時間足らず飛行機に乗れば日本だ。初日に北京への乗り換えに立ち寄った空港のはずだがなんだか印象が違う。出国の手続きも無事終え、機上の人となる。機内食の和食に大喜びした団員も。関空経由で団員一同元気に懐かしい高松空港に到着。空港ロビーで高松市国際交流協会の方々、学校の先生方、家族の方など大勢の温かい出迎えを受ける。この7泊8日の訪中親善使節団の役割をみんなで立派に果たすことができうれしく思う。中国で出会った人たち、そしてこの旅行で得た仲間たち、そして経験した数々の事、一生の宝物として持っていて欲しいと思う。今回の訪中の経験が、団員ひとりひとりのこれからの人生において役立つことを期待している。



集 感 所



高松と南昌と子供たちと

(財)高松市国際交流協会事務局長

蓮井 宣昭

突如、歓声が起った。昨年春、南昌市の青山湖畔に落成したばかりの友好会館での夕食の席上である。「例年になく活気がありますね」と館長の張知明さんが笑う第六回訪中の中学生であるが、雨期に入っただけでやや暗めの食堂には何となく浮かぬ気分が漂っていた。何しろ高松出発直前になって外事弁公室の李芸主任から、今年はホームステイは出来ないとFAXが入り、繰り返しての要請も効なく南昌到着の夜、駄目だとの宣告が周知されていたからだ。キャンセルの理由はおよそ想像はついたが、直前になって！誰からも明確な説明は得られなかった。しかしホームステイを抜きにするとこの旅は見学だけで価値が半減すると張館長と計って、夕食に同席した鍾楽初副市長に直訴、同席の陳副秘書長が中座して戻って来て手配したと言った。思いがけない即決の朗報に湧いたのである。お蔭で南昌第三中学校の劉謨彬副校長には献身的で慌しい交渉を強いることになった。彼は花束を持つ生徒代表と、小雨の空港に出迎えてくれたり、交流会を取り仕切ったり、その額の汗に思わず頭が下がった。

曾愛華校長の第三中学校は第二中学校と並んで市内屈指の優秀校で、高級教師の数でも著名卒業生の数でも群を抜いている。見学した動物剥製の部屋はどこ博物館にも引けをとらない。校舎改築中の昨年以外は毎春高松市の中学生を歓迎してくれており、その熱烈歓迎ぶりには瞠目する。曾校長は一見客よりも継続的交流ができる姉妹校が欲しいと頻りに言うのだったが、それにつけても弦打小学校で実施しているように互恵的に高松へも中高生を迎える計画は、経費の問題はあるにしても是非考えてみたいテーマである。

だが中学生はイノセントである。得難い体験のひとつひとつからのカルチャーショックを豊かな感受性で受け止めてそれぞれの心に深い痕跡を残すらしい様子を引率の教師たちは目撃した。皇帝陵墓、八一起義記念館、滕王閣、八大山人記念館、中国四大の一つ上海博物館等、高度の見学解説に生徒たちは熱心に傾聴するのである。これらの体験から彼らは国際理解への、自己アイデンティティ発見への、真の道程を歩み始めることであろう。

今年は意義深い年である。日中国交正常化25周年に当たるばかりか、香港返還の年でもあり、南昌市を唯一の省都の駅とする香港北京の鉄道も今年開通である。急速な経済成長の様子は、東洋一を誇る東方明珠塔の上から上海の開発区を鳥瞰するまでもなく、北京、南昌、上海の随所に見られる。「この立体交差も今年開通した所です」と空港から南昌市内に入る道すがら黄小燕さんが説明する。建国の息吹と言おうか、鄧小平が開いた改革開放路線は音を立て砂煙をあげて切り開かれつつある。

北京では柳が芽ぶき万里の長城近くでもアンズやレンギョウの花盛りだった。南昌でも新緑の楠が雨に濡れ、街角の花屋には色鮮やかな花が溢れていた。交通信号を圧倒する人の群とそのひとりひとりの意欲と優しさ、積み重ねられた文化の遺産と創造のエネルギー、恐らくこの中学生は再び中国を訪れざるを得ないだろう。



曾校長（左）と劉副校長

最後に、ホームステイは本年危うく実現したが、この行事の必須の目玉であることを将来も忘れないようにしたい。またそれを深めるためには参加者のことばの実用的な運用力の特訓は欠かせない。有意義な行事として毎年繰り返すだけでなく、更に充実させるための工夫と努力を怠れば、相手に飽きられることになるだろう。



近かった中国

高松市立一宮中学校教諭

鬼無教之

3月25日朝9時。多くの見送りの人々の中で、私は冷静になって一つのことだけを考えようと努めていました。それは21名の中学生を無事に親元に送り届けるために全力を尽くそうということでした。たとえ団体旅行であっても外国旅行では少しの油断から思わぬ結果を招くことがあります。まして、親善使節団ともなれば尚さらのことで、事故は無くとも日本人の代表という名札を付けていくわけですから、細心の注意が必要でしょう。いわゆる粗相のないようにすることも含んで、自らに緊張感をみなぎらせようとしていました。団長の蓮井先生からも「何とか上海での入国まで、無事に済ませられるように頑張りましょう。」と言われていました。

まず、上海での入国審査は予想以上に厳しいものでした。審査の列に並んだときには、前に5～6人しか並んでいなかったのに、私たちの審査が始まるまでに30分程かかりました。審査の仕方も、アメリカなどのように滞在目的を尋ねるのでなく、中国の係官がただひたすら旅券を見て何かと照合しているような様子です。高松空港を出発してから8時間以上経っていることもあり、立ったまま審査を待つ私たちは疲労の色を隠せませんでした。そして、北京で出迎えてくださった黄小燕さん、天平国際旅行社の高福来さんの後についてバスに向かった時には、高松空港での緊張感と集中力を無くしそうになっていました。

さて、中国の方に友人を持たない私にとって初めて知り得たのがこのお二人です。そしてこのお二人にお会いできたことを幸運に思っています。

高福来さんは優秀なガイドでした。同時に、プロのガイドとしてだけでなく、常に細やかな配慮をしてくださいました。万里の長城で集合場所に全員が揃っていない時には、私が捜しに行こうとするのを押しとどめ、ご自分で捜してくださいました。その他の人の多い観光地でも、その都度細かく指示してくださいました。その裏には、中国という外国で私たちが嫌な思いをしないようにという心遣いが感じられました。お別れする時「謝謝。」と言いながら握手を求めると、「先生、どうも。」と言いながら、私と握手したまま深々と頭を下げてくださいました姿を忘れることはできません。

また、黄小燕さんはたいへん日本語の上手な方でした。流暢な日本語で南昌市を案内したり、市の要人との通訳もしていただきました。私たちが南昌市を出発する時には涙してくださった黄さんでした。

もちろん、その他にもたくさんの方が私たちの中国旅行を支えてくださいました。当初できないと諦めていたホームステイをその熱意で可能にくださった張知明さん。私個人の都合で、急ぎ日本に連絡をしなければならなくなった時に、しっかりと私の腕をとって大混雑の上海大通りを渡らせてくださったバスの運転手さん。私たちが事故なく、またリラックスして旅程を終えられたのはこれら中国の方々のおかげでした。お世話になった中国の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。できることならもう一度、おひとりおひとりにお会いしてお礼を申しあげたいものです。

「中国」という言葉に懐かしさ、いとおしさを感じるようになった旅でした。高松市国際交流協会の方々をはじめ、お世話になったの方々にお礼申し上げます。



万里の長城にて



私の出会った中国の女性たち

高松市立玉藻中学校教諭

村井 智子

今回、訪中親善使節団の一員として中国に行く機会を与えてくださった方々に本当に感謝したいと思っています。中国の歴史の深さや広大さを体感できて、中国を身近に感じる事ができるようになりました。そして、いつの間にか誰かに「中国ではね……」と話し始めている自分に気がつきます。また、毎日朝夕通る中央通りの楠の新緑を見ては、南昌市のあの立派な楠の並木を思い出しています。あっと言う間に時間が過ぎていったあの8日間の日々がこんなにも心に残っているとは……

その中でも特に印象的だったのが、生き生きと仕事をしている中国の女性たちでした。まず、関空から乗ったジャンボジェットのフライトアテンダントの人たち。にこやかにそしてきびきびと働く彼女らはとても美しく見えました。空港で入国管理官などをしている女性たちも多く、やはり男女が均等に扱われている国柄が感じられました。北京に着いた日はとても遅い時間だったのに、美容院がまだ開いていて、たくさんの女性が利用していました。昼間はみんな忙しく働いていて、時間がないんでしょう。

そして、出会った南昌市の女性たち。

まず、一人目は北京から6日間ずっと私たちに通訳として同行してくれて、お世話くださった南昌市外事弁公室の黄小燕さん。彼女は高松市で半年間研修したそうで、もちろん日本語がとてもお上手です。毎年、この親善使節団の中学生をお世話してくださっているそうで、まだ、若いけど仕事ぶりはとてもすばらしい方です。公式行事などの難解な言葉も難なくこなして才媛振りを見せてくれました。日本から帰ってからも、毎日日本語の勉強は欠かさないそうです。もちろん、彼女は英語も堪能です。昨年、結婚されたそうですが副市長さんの秘書のご主人と家事はもっぱら平等だそうです。

二人目は友好会館の館長の張知明さん。彼女も高松で研修した経験を持ち、現在はご主人が高松の企業で研修中とか。彼女は昨年開館したばかりの高松市と南昌市の友好会館の館長として、運営が軌道に乗るまではと、一人息子を両親に預け、会館に泊り込んでいるそうです。彼女の采配振りは見事で、女性ならではの細やかな気配りで我々をもてなしてくれました。聡明さと行動力を兼ね備えた女性でした。今回のホームステイの実現も彼女のお骨折りによるところが多かったようでした。

三人目は南昌市の第三中学校の英語教師の尚先生。彼女は、団員のみなさんがホームステイに行った

後、緊急の対応のために友好会館に泊まってくれた人です。前日学校訪問や、交歓会の時もいろんな事を話し親しくなっていた人と次の日もう一度会えて、本当に嬉しく思いました。団員のみなさんにホストファミリーという特別の人たちが中国でできたように、私には中国に親しい友だちができました。お互いの子供のこと、夫のことなど色々話し、日本の歌を一緒に歌ったり、彼女の大好きな歌“Yesterday once more”を一緒に歌うなど心は中学生と同じでした。彼女は教育者として自信と誇りを持っていて、とても輝いている女性でした。

その他、夕食会でお会いした南昌市の要職についている方々も市の指導者としてふさわしい方のように、改めて中国という国での女性の存在の大きさがわかりました。また、みんな生き生きと自分の仕事をしている女性の多いことにも驚きました。

この訪中親善使節団の団員も7:14という比で女子の参加者が男子の2倍でした。日本の将来もなかなか明るいようです！



上海博物館にて



温かかった中国

高松市立屋島中学校養護教諭

詫間 弥生

団長の蓮井先生と、高松市内の中学生21人と共に、訪中親善使節団の引率者として、中国を訪問する機会を与えられ、貴重な体験をさせていただくことになりました。事前研修で、中国事情や中国語の勉強はしたものの、中国語は難しく、不安な気持ちもありましたが、悠久の歴史をもつ中国を訪問できるという期待で胸をふくらませ、3月25日に出発しました。

広大な国土と自然に囲まれ、数々の遺跡をもつ中国を訪れ、天安門広場、故宮、明の十三陵などを見学し、長い歴史を誇る北京のすばらしさにふれることができました。

又、史上最大の建造物といわれる「万里の長城」を自分の目で確かめ、そのスケールの大きさに感激し、万里の長城から眺めた雄大な景色を見たときの感動はいつまでも忘れないと思います。

上海では、豫園、玉仏寺などを見学した後訪れた上海博物館では、当時の中国の勢力や文化を感じることができました。

友好都市の南昌市では、言葉では言い尽くせない程の熱烈な歓迎をしていただきました。中日友好会館々長の張さん、南昌市人民政府外事弁公室の黄さんには、とても親切にいただき、心強い毎日を送ることができました。

南昌市の第三中学校では、正門に歓迎の大きな垂れ幕が掲げられ、花を手にした中学生から「歓迎、歓迎」と熱烈な歓迎を受けました。第三中学校は、優秀な生徒をたくさん卒業させている中学校ということで、授業も熱心に取り組んでいる様子がかがわれました。午後からの交歓会では、代表生徒のあいさつの言葉もすばらしく、披露してくださった踊りや歌は一流と思えるものばかりでした。自信をもった演技、好感あふれる表情、りっぱで落ち着いた態度などは、日本の中学生も見習わなくてはならないものがたくさんあるように思えました。

そして、南昌市では忘れてはならないことがあります。それは、南昌市人民政府の方々や市長様、第三中学校の校長先生のご配慮で、中止になっていたホームステイができるようになったことです。あきらめかけていたホームステイだけに、翌日、ご家族の方が次々と迎えに来てくださる姿に頭が下がる思いでした。一人一人が忘れることのできない思い出をつくってきたことと思います。

この訪中という機会を通して、国境を越えた人と人とのつながり、人の心の温かさにふれることができました。南昌市第三中学校の先生方、生徒達、そして、張さんや黄さんに出逢えたことで学ばなければならないことをたくさん見つげられたように思います。

最後になりましたが、訪中という貴重な機会を与えてくださった高松市国際交流協会ならびに関係の皆様方、献身的にお世話をしてくださった南昌市人民政府の皆様や中日友好協会の皆様に深く感謝いたします。



天安門広場にて



初めて異文化に触れた日

高松市立桜町中学校

香西美知

「謝謝！」中国という国の地面に足をつけて、自分をはじめに口にした言葉。その響きを思い出すだけで、あの8日間の出来事が、頭の中を走り回った。

中国での生活は、驚きと感動の繰り返し。その中で心に残っているのは、やはり中華料理。はじめは、辛くて食べれなかったら…と、不安だった。だが、食べてみると意外においしい。少し驚いた。そして、テーブルの上に並んだ食事をながめては、「これが中国なんだ。」と何度も思った。あの中華料理は忘れられない。

そしてもう一つ、心から離れないものがある。それは、中止となっていたはずのホームステイ。出発時はできないと聞いていて、友だちとがっかりしていたが、できるという報告をうけた喜びは、今でも忘れられない。だが、ホームステイ先での時間は、自分が思っていた以上に、言葉に言い表すことのできない充実感があった。ぎこちない英語を身ぶり手ぶりで表現するのが大変だった。中国の中学生は英語が上手で、とても同い年とは思えなかった。自分が勉強不足なことを学んだ気がする。また、家族のみなさんがとても優しく、私のためにいろいろと気をつけてくれた。優しいお姉さんとかわいい妹。そして楽しく明るいお母さん、おおらかなお父さん。みんなすばらしい人たちだった。私はこの家庭にホームステイできたことが、とてもうれしかった。中国に再び旅行に行った時は、必ず訪ねようと考えている。

ところで、私たちは中国の歴史にたくさん触れた。その中でも、一番印象深いのは、万里の長城。とにかくその長さに驚いた。どこまで続いているのかよくわからないこの建築物は、くねくねとして蛇のよう。垂直と言ってもいいくらいの坂や階段をやっと登ったと思ったが、まだまだ続いている。これが人の手で造られたとは、今でも信じられない。だが、それを自分の足で踏みしめ、手で触った感触は、まだ覚えている。

また、いつもテレビで見ていた天安門。それを自分の手でシャッターを切る瞬間は信じられない気持ちになった。

この八日間の中国の生活は、私のこれからの人生を、大きく左右させるだろう。中国という国は、そんな力があるのだ。この体験を生かし、世界へと、視野を広げていきたい。

今回、このような機会を与えてくださった、高松市国際交流協会の皆様、団長先生をはじめとする先生方、そして、20名の仲間たち、本当にどうもありがとうございました。これからも、自己を磨き、自分を成長させていきます。

謝謝！



天安門にて



自分の目でみた中国

高松市立桜町中学校

重川 祥

中国、それは、僕が初めて経験する海外でした。出発時の高松空港では、風邪がなおりかけたばかりで「行きたくないな。」と親に言ったりしていました。でも、ここまで来たら、みんなというほうが、楽しいのではと思い、結局行くことにしました。

長い時間、飛行機に乗り、北京で検疫を受けたときには、とても感動的でした。そして、空港から出ると「とうとう着いたのだ。」という感じでした。ホテルに行くまえに中華料理店で初めての中華料理を食べました。味は結構日本よりも辛かったけど、とてもおいしかったです。

次の日は、僕が一番楽しみに待っていた万里の長城に行きました。万里の長城はうわさに聞いたとおり、長くて大きなお城でした。到着したときは、意外と一番上までいけそうな距離だなと思ったのですが、実際に登ってみると、とても上り下りが多くて、長く険しい道のりでした。でも、一番上までのぼりつめたときの達成感は何とも言えないものがあり、冷たい風がすがすがしく感じられました。万里の長城は世界的に有名で、観光客も多く、又その分みやげもの店も多くありました。



万里の長城にて

3日目に行ったのは、天安門広場です。この天安門広場についてまず感じたことは中学校が4つぐらい入りそうだと、ということです。それは、一番端に立つと向こうの先が見えないくらい広がったからです。天安門をくぐって中の故宮に入ると、よく写真で紹介される、大きな、中国風の城がいくつもならんで造ってあり雄大ですばらしかったです。僕としては、その一つ一つを全部正面から写真をとりたいかったのですが、アメリカの副大統領が来訪中とのことで正面からは通れず、わきの道を通り少し残念でした。

だいぶ風邪もなおってきた4日目は、南昌で、中学生との交歓会がありました。今まで、練習してきた中国や日本の歌と高松踊りをしました。僕たちが帰るときには、みんなが、行列を作って花をふって見送ってくれました。その時に持ってきていた名刺やプレゼントなどを渡しました。

その夜まではホテル泊まりでしたが、次の日の夜は、ホームステイでした。ホームステイ先では、南昌第三中の頼君といろいろな話をして、高松市や中国のことについて教えたり教わったりしました。

上海に到着した当日は、上海明珠タワーへ行きました。高いタワーだなとしか思っていなかったのですが、中に入ると荷物検査があり、そこは、きれいで広くてすばらしい建物でした。上からの景色は、息がつまるほどでした。

次の日の朝、上海動物園へパンダを見に行きました。朝のパンダはけっこう動きがあっておもしろかったです。

最後になりましたが、僕は、中学生訪中親善使節団に選んで下さった先生方や高松市国際交流協会の方々に感謝したいと思います。

— 謝辞 —



一生忘れない旅行

高松市立紫雲中学校

笠井 聡一郎

「えっ、選ばれたんですか？」っていう感じで、中国を訪問することが決定した僕。それから中国へ行くまでに「大丈夫か、オレ…」とと思っているとすぐに研修は終わり、出発の3月25日。まだメンバーの名前と顔が一致しないまま「ま、とにかく行こうか…」などと思いつつ中国へ。そして、一生忘れられないような多くの出来事がそれからの8日間に待っていました。天安門広場や故宮、それに明の十三陵などの見学…。言葉にできないほどのすばらしい体験をさせてもらいました。その中でも特に印象に残っていることがいくつかあります。

一つは万里の長城の見学です。そこに着くまで「ま、多少は長いらしいけど…」ぐらいにしか思っていなかったのですが、着いてみると予想よりはるかに長くてびっくりしました。数字を見ても全くイメージはわかかなかったのですが、はっきりとした光景を目の前にして納得しました。そして、その道は考えていたより高低差があり、バスの中で友だちと話していた「かけのぼり競走」をすどころではありませんでした。上のほうまで登ってみると景色がとても美しく感動しました。



ホームステイ先の程君一家と

もう一つは、南昌第三中学を訪問したことです。「日本の学校よりは大きくもないし、きれいでもないんじゃないの？」と（中国の方々に対して失礼ですが）僕はイメージしていました。しかし、着いてみると口から「日本の学校の方が負けてる…」と言葉が出ていました。しかも、歓迎会では素人とは思えないほどの歌やおどり…。そのとき、僕の中国や中国の人に対するイメージは正しくなかった、ということに改めて実感しました。

一晩だけになってしまいましたが、ホームステイは、この旅の中での一番の思い出です。ぼくが泊まった程君一家は、両親と程君の三人暮らしです。また程君の呼びかけで友だちが5人も集まってくれました。このとき驚いたのは、彼らがとても上手に英語を話せることでした。僕も少々自信はありましたが、自分の未熟さを思い知らされました。そんな僕に程君やその友だち、また御両親はとても優しく接してくれました。程君のお母さんのつくってくれた料理は、今までに食べたことのない味でしたが、とてもおいしかったです。彼の家でいて一つだけ困ったのが、お風呂です。案内されると、そこはトイレでした。しかし、頭上に管がついてあり、そこから湯が出てくるのでした。どう考えてもトイレの周りは水びたしになるんです。ずっと一人で悩んでいました。

そして程君とお別れの日。手紙を書く約束を何度も繰り返して、ついにお別れ。僕は機会があれば、また彼に会いに行きたいと思います。

最後になりましたが、この機会を与えてくださった皆様、さわぐだけさわいでいた僕らを指導してくださった先生方、そしていっしょに旅をして楽しい思い出をくれた20人の友だちへ、一謝々。

ほんとうにありがとう。



私の思い出

高松市立玉藻中学校

吉永香織

今、私の手元には数えきれないほどたくさんの写真があります。見ているとあの中国での八日間の旅の思い出が蘇ってきます。万里の長城、中学校の訪問、ホームステイ、上海タワー…。中国でつくったこの思い出は、私にとってかけがえのない宝物です。

私の目標は、「中国の人と友達になること」でした。1997年3月28・29日。この日は、中学校の訪問やホームステイをした日です。ついに目標が達成できるという気持ちで朝起きたことを今でもはっきりと覚えています。しかし、いざ出発となると会話のことやコミュニケーションがちゃんととれるかと、緊張してきました。中学校に着いたときの熱烈歓迎は言葉に言い表せないものがありました。向こうの方も私と同じ気持ち（友達になりたい）でいると思うと勇気がわいてきました。実際、いざ話してみるとあちらのほうがだんぜん英語がうまくて、あまりたくさんの会話ができませんでした。でも、心と心は通じあえたと思います。それが何よりうれしかったです。ホームステイでは、中止になっていたのに、たくさんの人の力によってできるようになったこと、とても感謝でした。「你好」「謝謝」それと自分の名前しかまともに中国で話せないのどうしようかと思いましたが、ホームステイ先の何秋蕾さん家族に暖かくむかえられ、とても楽しい時を過ごすことができました。私がホームステイで強く感じたことは、コミュニケーションをとるとき、英語の文法とか発音はあまり気にしないで、とにかく自分の気持ちを伝えようとしゃべることが大切だということです。やっぱり、声を出さなきゃ何も伝わらないし…。私は、はっきり言って英語は苦手です。でも、気持ちは伝えることができました。お別れするとき、何度も「謝謝」と言って別れました。またぜひ何秋蕾さんに会いたいと思います。

上海では、仲間たちともすっかり仲良くなって中国の旅が楽しくて仕方ありませんでした。動物園では初めて本物のパンダを目の前で見ました。また、その動物園でおじいさんおばあさんが太極拳をやっている姿は、さすが中国という感じがしたし、活気を感じました。私たち、女の子の楽しみといたらお買い物。日本と違って、いろいろとまけてくれるので楽しくてしょうがありませんでした。

私は今回の使節団員に選ばれたこと、本当にうれしく思っています。私はたくさんの事を学んで帰ってきました。この体験を生かし、これから少しずつでも国際交流の輪を広げていきたいと思っています。そしてまた、中国に行きたいと思っています。

最後になりましたが、この機会を与えて下さった高松市国際交流協会のみなさま、中国でお世話になったみなさま、四人の先生方と二十人の仲間たち、本当にいい思い出をありがとうございました。謝謝。



友好会館にてホームステイ先の何秋蕾さんと



大きくて、広かった

高松市立光洋中学校

大西 健太郎

「大きくて、広かった！」本当にそうでした。日本に帰ってきて、先生や友だちから「どうだった？」と聞かれて、答えたのはただその一言「大きくて、広かった。」

初めての海外旅行ということで、出発の時は緊張していたし、あまり実感もありませんでした。ところが、北京に着いて夕食を食べた時、思わず「辛い。」と叫んでしまいました。その辛さに、一ぺんに「中国に来たんだ。」という実感がわいてきました。そして日がたつにつれ、辛さに慣れて、「北京ダック」という料理はとてもおいしくて、日本に帰ってからもまた食べたくて、母にねだったほどです。

北京で見学した明の十三陵は、日本ではとても考えられないくらい、とてつもなく広いお墓でした。有名な万里の長城では、きつくて長い坂をみんなでかけ上がりましたが、僕は途中で脱落、歩いてしまいました。天安門広場や故宮など写真でしか見たことがない所を、現実にこの目で見ることができ、本当にいい経験になりました。

高松の友好都市である南昌市では、少年宮での踊りや歌のうまさにとっても感心しました。中でも一緒に日本の歌を歌ったことが心に残っています。次に第三中学校での交歓会では、とてもすばらしい演奏や演技を見て、感動の連続でした。そして、何ととってもホームステイはよい思い出になりました。一度、ホームステイは中止になりましたが、南昌市の副市長、第三中学校の校長先生のおかげで、突然復活したときにはうれしくてたまりませんでした。少しは不安な気持ちもあったのですが、家族の皆さんのおかげでとても楽しく過ごすことができました。特に、僕がのどを悪くして咳こんでいるとすぐに薬を持ってきてくれたことにはとても感動しました。それから驚いたこともありました。それは、年が変わらないのに勉強がとても難しいことです。英語も上手でした。僕も少しは自信がりましたが、とてもかなわず分からない時は少し恥ずかしい思いをしました。翌日、中日友好会館で別れる時には固い握手をして、名残りを惜しみました。



万里の長城にて

上海といえば、上海博物館が思い出されます。写真を撮ることができなくて残念でしたが、とても多くの美術品を見ることができ、よかったと思います。その数、何と10万点！これまた驚かされました。

今回の訪中で、僕はとても有意義な時間を過ごせたと思います。

中国訪問というチャンスを与えてくださった、団長先生をはじめとする先生方、高松市国際交流協会の皆様、黄さんたち中国でお世話になった方々、ありがとうございました。

最後に、8日間を共に過ごした親善使節団員のみんなと友達になれたことは一生忘れません。

また今度、21人で旅をしよう、絶対に。 —— 再見!!



中国発見

高松市立城内中学校

稲毛 慶太

「中国」それはぼくにとってまったく未知の世界でした。いくら日本に近いといっても、中国の人たちの生活様式や文化は、まったく見当がつかせませんでした。それは事前に行われた研修を終えた後でも同じでした。

25日に北京についたとき、まず目についたのが漢字だらけの看板でした。この看板を見た時、ようやく中国に来たんだと実感することができました。翌日、中国のことをあまり知らないぼくでも何度も耳にしたことのある万里の長城を見に行き、その長さや高さ、また、天安門広場ではその広さに、圧倒されました。

そして次の日、北京から南昌に向かう飛行機の中で、ぼくは一つの不安を抱いていました。それは、ホームステイ先で気まずくならずに楽しい時間が過ごせるだろうか、ということでした。しかしその日、第三中学校に行く前に、ホームステイは中止になったと伝えられ、不安ではいたものの、とても残念に思いました。そこで第三中学校ではしっかり中国の人たちと友だちになってくださいと先生方に言われて訪問した中学校では、すごい歓迎を受けました。そしてその夜、第三中学校で友だちになった生徒たちとの夕食会で、南昌市の副市長さんや中学校の校長先生の努力で、一泊だけだけれど、ホームステイができるようになったことを知らされました。

その次の日の夜、迎えに来てもらって入った中国の家では、こちらが緊張しているのを感じ、とても親切にいただき、今までの不安をかき消してくれました。

そこでは、日本から持ってきた竹とんぼで、非常に盛り上がりました。ぼくが泊まった家にはカラオケがあり、日本語で「さくら」の歌を歌ってくれと言われて、マイクを手渡されたのに、ぼくは歌詞がわからずに、歌うことができませんでした。ところが、その父親は、スラスラと歌ってくれたのです。そこでぼくは、もしかするとぼくのために練習してくれていたのではないかと思い、歌ってあげられなかった自分に、少し腹が立ちました。

翌日、ホームステイ先の家族の方と悲しいお別れをして向かった最後の目的地、上海では、中国最大規模の上海博物館のすばらしい展示品におどろき、動物園で見たパンダに感激しました。



ホームステイ先にて

これで、楽しく、多くのことを学んだ8日間の旅は終わりました。しかし、中国で見て、聞いて、肌で感じとった経験は確実にこれからのぼくに影響していくと思います。

最後に、このようなすばらしい経験をさせてくださった、蓮井団長先生を始めとする四人の先生方と20人の仲間たち、そしてぼくを支えてくださった周りの人たちに、心からお礼を言いたいと思います。謝謝。



心に残る出会い

高松市立鶴尾中学校

武田 知夏

私が訪中親善使節団に参加してとてもよかったと感じたことは2つあります。

1つめに、たくさんの友だちができたことです。初めて会ったころは友だちができるかどうか不安でした。でも少しずつみんなと仲良くなり、帰ってきたとき別れるのがすごくつらかったです。みんな学校がちがうので、会うことはなかなか難しく、すべての人たちと会うことはできません。でもこれからも手紙なんかで連絡をとって、せっかくできた友だちといつまでも仲良くしていけたらと思います。

2つめは、ホームステイができたことです。

中国へ行ってから、初め、ホームステイはできなくなっていたのですが、現地のみなさんのおかげで1日ホームステイさせてもらうことができました。第三中学のみんなは、とても英語がうまく、私がホームステイした家の子もとてもうまかったです。私がぜんぜんできないのでとてもこまったことでしょう。でも、いやな顔ひとつせずゆっくり、私ができるまで根気よく教えてくれました。

だから私の持っていった電子辞典も使ってなんとか会話ができました。

おうちの人にも、とてもよくしていただきました。私がお風呂から出て来ると、髪をふいてくれて、しかもドライヤーでかわかしてもくれました。日本ではないことなので、とてもびっくりしました。あとで友だちに聞いてみると、その子もホームステイ先のお母さんに髪をかわかしてもらったそうです。それから私がせきをしていると、すぐに薬を持ってきてくれて、飲ませてくれました。そのとき、とてもうれしくて涙が出そうになりました。

タクシーで友好会館まで送ってもらうとき手紙を書くと言ってくれてとてもうれしかったです。別れるとき、写真をいっぱい取りました。バスにのってから窓から手を振るとき、たった1日しかいっしょに過ごしていないのに、とってもとっても悲しくなりました。

泣いている子もいました。私は泣かなかったけど実は涙が出る寸前でした。一生のうちのベスト10に入るぐらい、とてもよい経験をしたと思います。大人になったら、ぜったい南昌市へ行き、もう一度あの家族と会いたいと思います。最後に、こんなに心に残るとてもよい出会いと経験をさせてくれたすべての人に感謝します。

ありがとうございました。



南昌の友達と



晶晶たちから学んだ事

高松市立屋島中学校

溝 渕 悠 理

たった一週間。けれど、その間私が心に吸収した事は、学校での勉強に劣らず楽しく、そして大切な事でした。

実は、海外は初めてという私には、飛行機に乗ってからも実感というものがありませんでした。とりあえず、「しっかり見て、聞くこと」「積極的に、沢山の人と親しくなること」これだけ心に決めて出発しました。

やはり不安なのは南昌でのホームステイでした。でもそれに惹かれて参加した私です。中止と聞いた時はがっかりしました。まるで桜のないお花見。それだけにまた計画されると言われると、飛び上がりたいほどの喜びを感じました。副市長さんを初めとする方々には、感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、私は宿さん一家にホームステイということになりました。晶晶という一つ年下の女の子がいて、一泊だけでしたが、仲良しになることができました。中国の人は英語が上手と、訪中の前から聞かされていたので、私はある程度覚悟を決めていました。やるしかありません。持って行った辞書とペンと紙、そして普段ほとんど使わない身ぶり手ぶりで、何とか頑張りました。通じた時、私も晶晶も一緒になって喜びました。夜、12時が過ぎるまで、なかなか通じない言葉をしゃべっていました。彼女は、積極的になれない私に、明るく分かりやすい英語で話しかけてくれました。

英語が話せるのは晶晶だけでしたが、お父さんは子供のころ日本語を勉強していたそうです。朝「早上好」と私が言うと、「おはようございます」と返してくれました。

予定が変わって一泊になったけれど、晶晶と友達になれた事は、本当によかったと思います。“You are my sister.”と言ってくれた時は、何と言って良いか分からないほどうれしかったです。これからも、英語での文通で、ずっと親しい友達でありたいと思います。

ところで、私達は南昌の他にも、北京そして上海という大きな都市を訪れました。そのほとんどが観光です。

北京は、私の気に入った場所です。人だらけでごちゃごちゃしてはいるけれど、何より歴史を感じる所です。それに、日本では見られない広さ、そして美しさを実感できる所でもありました。頤和園は、この中にいくつ町ができるだろうと思ったし、故宮は、ああ広いなあ…と思いながら門をくぐると、また同じような建物が遠くに見えたりするのです。何から何まで手がこんだ建築物の鮮やかさにも目を見張り、へえ、これが中国か…と感動する思いでした。



ホームステイ先で晶晶と

今でこそ日本は先進国とも言われる豊かな国ですが、広さと歴史の上では中国に感服するなあ、と思いました。

最後に、こんなに素晴らしい機会を与えて下さった皆様、中国でお世話になった黄さんや張さんを初めとする皆様、そして先生方と楽しい仲間達、本当にありがとうございました。



本物の中国を見て

高松市立協和中学校

向井紀代

今年の春休みはいつもと違って、収穫の多い休みになりました。広い世界に出てみてもいいかなぁと思って、応募して団員に内定した時から私の中国の旅は始まっていました。少しは中国語も勉強したものの、発音が悪いせいか、ほとんど使えず、「中国語はムズかしいなぁ」というのと、「英語は世界共通語だ!!」というのがわかってきました。

広いユーラシア大陸の国、中国へ行って、得たものは数えきれないほどあります。何もかもが新鮮で、驚いてばかりだった8日間でした。その中には、テレビや本でみるのとは違って、肌で感じられてこそだということもたくさんあったように思います。

そのうちの一つはやっぱりホームステイで学んだ中国の生活についてでした。初めはできないといていたのが、たくさんの人のおかげで実施できたのです。それだけに、単なる観光気分混じりの今までの行動とは少しちがっていました。昔の日本は中国にいろいろと悪いことをしていたのを知りながらも心よく迎え入れてくれた羅穎亮さんたちには本当に感激しました。積極的に英語を話してくれて（英会話かも…）、同じくらいの年齢の子かと疑いそうになるくらいでした。

ホームステイだけではありません。目に映るもの全部が日本と違っていて、驚いてばかりだったので

す。

高松はけっこう自転車が多いと言われますが、中国はどこを見ても自転車と人で埋めつくされているような気がしました。

確かに、多くの所がちがうのですが、漢字で書かれた看板などを見ていると、中国と日本との深い関係も見えてきたように思いました。

隣どうしの国なのに、本当はすごく離れている、「近いけど遠い国」に今回の旅でまた少し近づけた気がします。「少し近づけた」ことでこれからの国際交流の輪がまた一つ大きくなったのかなと感じます。長いようで短かった8日間の旅は終わってしまったのに私の心の中には今も鮮明に浮かんできます。そして今、お世話になった人に、とにかく、「謝謝。」と言いたいです。

団長先生や諸先生方、そして第三中学校のみんなに、黄さんや張さんたち通訳、ガイドさんにも。もちろん、8日間私を支えてくれた最高の20人の仲間にも。



ホームステイの友だち羅穎亮さんとホテルに戻ってから撮ったもの



忘れられない中国での8日間の旅

高松市立龍雲中学校

久保 友香理

中国での8日間。出発前は長いと思っていたけれど、気がつくとあっという間に過ぎてしまっていました。でも、その8日間の一日一日が今では忘れられない大切な思い出となっています。

長い飛行機の旅を終えてやっとのことで到着した北京。まわりからは、わけのわからない中国語が聞こえてくるし、看板は漢字だけで読めないものばかり…。本当に、中国へやって来たんだと私は実感しました。そして空港を後にし、私たちはレストランで食事をとりました。そう、私にとって初めて食べる本場の中華料理です。しかし、機内食の食べすぎのせいか、テーブルいっぱいには並べられた料理を前にしても箸がなかなかすすみませんでした。このときはほんと悔しかったです。この中国の旅では毎日中華料理を朝昼夜と続けて食べてきたのですが、北京・南昌・上海と味がちがっていて飽きずにおいしく食べまくりました。ただ、やっぱり日本の料理とちがって油っこいので少しずつ胃にもたれました。中国の人々はこの料理を毎日食べているのだからすごいなと思いました。

私はこの中国の旅でとても楽しみにしていたことがあります。

一つは遺跡めぐりです。私は中国の歴史に興味があり、事前に「中国十八史略」を読んで勉強してきました。そして実際に数々の遺跡を訪れてみて、歴史を物語るその壮大さ、美しさに驚き感動しました。その遺跡の中でも特に印象に残っているのは万里の長城です。6000kmのほんの一部を私たちは歩いたのですが、思っていたよりずっと急で、のぼり終えたときには息があがってしまいました。万里の長城からながめた景色は雄大で今でも鮮明に覚えています。この景色を何百年も昔の人々もながめたのかと思うと、何だか不思議な気持ちになりました。本当に貴重な体験をすることができてよかったです。

そして二つめはホームステイです。このホームステイは、いろいろな都合で当初中止になってしまっていたのですが、前日の夜に急にできることになりました。ホームステイができることになったと聞いたときはうれしくてうれしくて、その夜は「ステイ先の子はどんな子かな？英語ちゃんと通じるかな…」と期待や不安でなかなか眠れませんでした。当日、私は張さん一家のお宅へホームステイさせていただきました。車で南昌をあちこち連れて行って下さったり、おいしい果物・おかしをいただきました。そのとき食べた物の中でめずらしかったのが「瓜子」というすいかの種。これは殻があって、まずそれを歯でわってから食べるのですが、私はそのまま食べてしまい、張さんに笑われてしまいました。たった一晚という短い時間でしたが片言の英語や中国語、ジェスチャーなどで学校や家族のことなどを話したり、写真を交換しあったりして楽しく過ごすことができました。まるで家族のように接して下さって本当にうれしかったです。必ず手紙を書こうと思います。



南昌第三中学校で案内してくれた周さん(左)と一緒に(第三中学)

この旅で私は中国に国境をこえた友達をつくることができ、遺跡をめぐることで中国の歴史を感じ、この目で中国の生活を見、体験することができました。この経験を生かして、自分の国際的な視野を広げて生きたいと思っています。

最後に、今回このようなすばらしい機会を与えて下さった皆様方、中国でお世話になった方々、団長先生をはじめとする先生方、そして20名の仲間達に心から感謝します。本当にありがとうございました。 — 謝々 —



中国で8日間を過ごして

高松市立勝賀中学校

大前佑花

3月25日、8日間の旅の始まり。けれど、高松空港に着いてもまだ、私の心は「無事に行ってこれるだろうか。」という不安でいっぱいでした。「8日間なんて長すぎる。」とっていました。しかし、今、中国から帰ってきて思い出すのは楽しいことばかりです。8日間なんてあっという間でした。

私が「あっ、今私は中国にいるんだ。」と初めて実感したのは、飛行機の中から中国の風景を見たときでした。平地がずっと広がり、大きな川が曲がりながら流れていて、その近くには同じような家がいっつも並んでいました。日本の風景とは全く違っていました。

日本と大きく違っている点は、もう一つありました。それは交通の様子です。広い道路がいっぱいになるくらいの人と自転車。ものすごく活気があります。バスのすぐ横を自転車で走ったり、車の前を走って横断している人たちには、とても驚かされました。

そして、不安もありましたが、私が一番楽しみにしていたのはホームステイです。私は張艶ちゃんという女の子の家でお世話になりました。張艶ちゃんは英語がとても上手で、私にたくさんのお話をしてくれました。私たちはお互いに、自分の国の遊びを紹介したり、歌を歌ったりして楽しい時を過ごしました。

張艶ちゃんの家族も、とても優しくしてくれました。パンやコーヒーをたくさん勧めてくれたり、アルバムを見せてくれたりしました。一番心に残っているのは、張艶ちゃんのお母さんが、お風呂から出た後の私の髪をドライヤーでかわかしてくれていたことです。

英語には少し自信のあった私ですが、実際に話すとなると、緊張してほとんど忘れてしまいました。一応練習しておいた中国語もあまり使えず、ジェスチャーが一番役に立ちました。少し残念でしたが、言葉は分からなくても、お互いに相手の言うことを一生懸命分かろうとすれば、きちんと通じあうことができるということを自分自身で感じることができ、とてもうれしかったです。

お別れの時は、すぐにやってきました。本当につらかったです。たった一晩だったけれど、私はこの日のことを一生忘れません。これからも、張艶ちゃんとは文通を続けていこうと思っています。

私は、この訪中親善使節団の一員となれたことを本当にうれしく思っています。中国の地で、いろいろなことを学んだり、たくさんの友達を作ったりと、多くの思い出ができました。このような素晴らしい機会を与えてくださった高松市国際交流協会の方々には、心からお礼を言いたいと思います。また、蓮井団長先生に鬼無先生、村井先生、詫間先生、その他にも中国でたくさんの人にお世話になりました。本当にありがとうございました。

最後に、20名の団員のみんな、いい思い出をありがとうございました。



ホームステイ先の張艶ちゃんと



中国てんやわんや記

高松市立一宮中学校

藤原 新太郎

私が中国を旅して得た教訓。1、聞くのと感じるのでは大違い。2、鍵は部屋から必ず持ち出す。3、集合時間の5分前には必ず、指定された場所に集まる。

1つ目の失敗は、北京での事だった。学校の先生に万里の長城は寒いと聞かされ、防寒用に真っ黒な重いスキー用のコートとカイロを持っていった。しかし、万里の長城では、寒くはなく、コートを着ていった私にとっては地獄のような暑さだった。頂上についた時は、汗で服がビショビショだった。

2つ目の失敗は、南昌での事である。中国で行ったホテルはどこもオートロックで外に出ると、外からは鍵がないと、部屋には入れない仕組みになっている。そこでの失敗は鍵を持たずに、外に出てしまったことだった。運が悪く、ロビーも閉まっていたらしく、結局、友達の部屋の床で寝ることになってしまった。

3つ目の失敗は、上海での事である。集合時間は5時20分だった時に、5時18分に集合場所に行った時にバスは、既に出発していた。驚くや否や死ぬ気でバスを猛スピードで追いかけたら、幸運にもバスに追いつくことができた。あの時は、本当に死ぬかと思った。

旅行中に、一番印象に残った事は、このような失敗ばかりではなく、古代遺跡の見学なども、とても印象に残っている。万里の長城を一目見た時、“すごい”としか思い浮かばなかった。中国人のスケールや考え方が全く違うということ、ただ呆然として見ていた。

この旅行で一番楽しみにしていた事はホームステイだった。中止と聞いた時は、本当に残念だったが、南昌第三中学校の校長先生のおかげで、ホームステイが予定より一日遅れで、できるようになった。ホームステイ先では、初めのうちは何をするのか分からなかった。そこで、日本から持ってきたトランプでトランプゲームをした。説明するには、どうすればいいかとまどったけれど、しぐさで、説明することにした。ホームステイ先の生徒はスラスラとルールを覚えてビックリした。ゲームは、ババ抜きをはじめ、七並べ、神経衰弱、ポーカーなどを行っているうちに、2時間がいつのまにか経過していて、入浴する時間になっていた。浴そうとトイレは共通になっていて、浴そうといってもシャワーしかついていなかった。私が話す中国語は、ニーハオ、シェイシェイぐらいしか通じず、風呂から出る時は困った。寝る時はTシャツ一枚で寝かされ、おきた時はとても寒くてクシャミがでた。この1日間、中国の人達と生活を共にし、中国の人たちの素晴らしさを再発見できたと思う。



団員のみんと

中国は、とても広い国である。その国を見て、聞いて、感じたことによって、自分は、一回りも、二回りも大きくなったと思う。最後に、高松市国際交流協会の皆様、ホームステイ先の人たち、南昌第三中学校の校長先生、本当にありがとうございました。



楽しかったホームステイ

高松市立香東中学校

角本 彩

3月25日。たくさんの不安を抱えたまま、高松空港を後にした。中国に着いて、初めに気がついたことは、自動車と自転車が入り交じって走っているということだった。ぶつかりそうになっても、どんどん突っ込んでくる様子には、たいへん驚かされた。

1日目の北京では、私がとても楽しみにしていた万里の長城を見学した。テレビでは何度か見たこともあったけれど、本当に自分の目で見て歩いたときの満足感は、今でもはっきりと覚えている。明の十三陵では、とても大きな大理石でできたお墓を見学した。大理石だと、体がくさらずにそのままの形で残ると聞いたけど、本当かなと思った。

3・4日目の南昌では、第三中学校や少年宮での熱烈歓迎がとても印象的だった。中学校では、楽器演奏や歌などをとても上手に発表してくれた。私たちもそれに応えて、『花』を歌ったり、『高松おどり』を踊ったりして、とても楽しい時間を過ごした。私たちがバスに乗るときも、一列に並んで見送ってくれた。少年宮では生徒たちが、日本の歌を合唱してくれたり、習字や絵を書いている様子を見学したりした。南昌の予定では、私が最も楽しみにしていたホームステイが二日間あるはずだった。しかし残念なことに一日しかできなかつた。その一日も、副市長さんや張さんなど、たくさんの人のおかげでやっと実現した。

いよいよ当日の夜。名前を呼ばれて握手はしたものの、緊張していたので、「何から話せばいいんだろう、どうしよう。」と、そればかりが頭の中を回った。でも、そんな緊張を忘れるくらい細かいことまでよく気を使っていたが、本当に嬉しかった。あまり時間がなかつたにもかかわらず、広場や食事に連れて行って下さったり、カラオケをさせて下さったりと、本当に楽しかった。それと同時に、英語の必要性を改めて感じさせられた。中国の友人とは、必ず手紙を書くからねと、約束して別れた。

次の日上海に向かい、最後の日に上海博物館を見学した。何万年も昔につくられた物が今、自分の目の前にあると思うと、とてもわくわくした。どれも特徴があり、不思議な形をしていて、興味深い物ばかりだった。

今回の旅で、本やテレビでは味わえない貴重な体験をした。他国の文化に触れ、人間に触れ、たくさんのことを吸収した。このような体験ができたのも、高松市国際交流協会の皆様や、蓮井団長先生を始めとする諸先生方のおかげです。

もちろん、中国各地を案内して下さった黄さん、周さん、張さん、その他、たくさんの方々にお世話になったことを忘れてはなりません。

最後に、一緒にすばらしい時を過ごした仲間たちへ。

— 謝辞 —



ホームステイ先の友達と



貴重な8日間の旅

高松市立下笠居中学校

生 南 佑 美

3月25日、私は中国へ旅立ちました。私はあの8日間の楽しい旅を一生忘れることができないと思います。毎日が本当に楽しかったので、目をつぶると今でもその情景が浮かんできます。初めは中国に着いたという実感がなかなかわいてこなかったけれど、バスの中から北京の町並を見て『ここはやっぱり中国なんだ!』と感じました。

私が一番心に残っているのは羅青さんの家でホームステイをした事です。羅青さんと家族の人が迎えに来てくれたときに、羅青さんの上手な英語を聞いてすぐおどろきました。どうせ私と一緒に片言しか話せないだろうと思っていたのに大きく予想がはずれました。家に着いてしばらくすると羅青さんの友だちが来て「初めましてどうぞよろしく。」と日本語で言ってくれました。おどろいたのと同時にすごくうれしく思いました。私も中国語をもう少し勉強していたら良かったと反省しました。「我叫生南佑美。請多关照。」といつも同じことしか言えなくて情けないなあと思いました。まず、カラオケを聞かせてくれて、その後3人でトランプをし、10時ぐらいまで遊びました。羅青さんにベッドに勧められたので、少しはよい気がしたけれど眠りました。朝食は中華だと思っていましたが、中華はギョーザとザーサイだけで、パンや目玉焼きなど日本でもよく



ホームステイ先の家族と

食べているものが出て少し意外でした。とうとう家族の皆さんと別れる時間がやってきて涙が出そうになりました。たったの12時間(睡眠時間を含めて)しか一緒に過ごしていないのに不思議な気分です。ホームステイが終わって一番思ったのは、もっと英語をしておけば良かったということです。

2番目は北京で万里の長城に登ったことです。TVや歴史の教科書でよく見るけれど、実際ここまですごいとは夢にも思いませんでした。斜面はとても急になっているので何度も転びそうになりました。あまり時間がなかったので遠くまで行くことができず残念です。でもこの私の足で万里の長城に登ったという感動は、まだしっかりと残っています。

3番目は第三中学校を訪れたことです。バスで第三中学校に到着した時、たくさんの生徒が並んでいる姿が見えました。バスから降りると、「歓迎、歓迎」と大きな声が聞こえてきて、とても感激しました。交流会では素晴らしい演奏や踊りをみせてもらいました。私より小さな年の生徒もいたのにあんなに素晴らしい演奏ができるなんて、今でも信じられないくらいです。

友好会館館長の張さんには、本当にお世話になりました。なくなるはずのホームステイを一日だけでもできるようにしていただけてとてもうれしかったです。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった高松市国際交流協会の皆様、蓮井団長先生を始め引率してくださった先生方、熱烈歓迎をしてくださった南昌市の皆様、そして20人の仲間達、本当にありがとうございました。「謝謝」



言葉の壁をこえて

高松市立男木中学校

福井 あかね

中国での8日間。それは、今まで私がなにげなく過ごしていた日常とは違い、とても充実した毎日でした。

そしてこの旅行で、最も印象に残ったことはホームステイです。一番楽しみにしていたにもかかわらず、本当は一番不安でした。不安に思っていた原因は「言葉の壁」です。中国語はもちろんのこと、英語も満足に話せない私としては、この壁は越えられないと思っていました。そして不安と緊張の一瞬。ホームステイ先の人との対面です。その時は中国語で自己紹介しようと何度も練習していましたが、頭がパニックでなにもかも忘れてしまったぐらいでした。今となれば、なぜパニックになっていたのかが不思議です。しかし時間がたつにつれジェスチュアや筆談でなんとかお互いに通じ合えて仲良くなれました。そして私はもっと日本のことを知ってほしいと思って折り紙の「つる」を教えることにしました。私は折り紙とは日本独特のもので、ましてや「つる」の折り方などは知りもしないだろうと勝手に想像していました。しかし私がつるの折り方を見本として折っている途中に、祝丹さんが「I know, I know」と言って一人でどんどん折って進めていきました。そして出来上がったのは、「中国のつる」でした。中国にも折り紙に似た遊びがあるのかもしれませんが。私は国境を越えた遊びがあっという間になってしまいました。そんなことをして遊んでいるうちに寝る時間がきてしまいました。その夜は、祝丹さんのふかふかベッドを貸してもらい寝ました。そして次の日。かわした言葉数は少なくとも、やっぱり別れは悲しいものです。最後には本を見ながらでしたが、中国語で「ご親切にありがとうございました。」と言いました。そして、「再見。」と言いながら精いっぱい手をふりました。「言葉の壁」とは名ばかりで、気持ちが通じあっていればなにも恐れることはないということが分かりました。今では、中国語を勉強して、中国へもう一度行きたいと思います。もしその時に、祝丹さんの家に遊びに行けるのなら、今度こそは中国語で自己紹介したいです。

中国の思い出は、まだまだ数えきれないほどあります。中国のおはしは長くて先まで太かったこと。車のクラクションの多さと、車のすぐ前を横ぎる人がたくさんいたこと。万里の長城の長さ、景色がきれいだったこと。そして何よりも、この旅にかかすことのできないことは、人との出会いだったと思います。中国でお世話になった方々、引率の先生方、本当にありがとうございました。騒がしくていろいろと迷惑をかけてしまったかもしれませんが、この旅でいろんなことを体験し、学ぶことができました。そして20名の友達のみならず、みんなと一緒にいれて本当に楽しかったよ。最後になりましたが、このような、またとない機会をくださった高松市国際交流協会の皆様、ありがとうございました。これからは、この旅で築いた国際的な友情を大切に、視野の広い人間になりたいと思います。謝謝！



ホームステイ先の友人と



異文化のなかで

高松市立山田中学校

田中正剛

3月25日、朝起きた時僕はいつもと違う何かを「はっ」と感じた。それもそのはず、その後には予想もつかない珍道中が待ちうけていたのだから。

飛行機を乗り継ぎ北京に着いた時、とてもほこりっぽい所だと感じた。スモッグがでていたのだ。夜ライトに照らされた所を見ると、スモッグの粒子がみえそうなほどの濃さだった。黄砂のためだと聞いたが、風に乗って日本までやってくるのだから、その猛威はすごい。

天安門広場や、万里の長城、明の十三陵と、いろいろな場所を訪問したが、そこで実感したことは、規模が日本とは比べものにならないということだ。天安門広場は広さ44haで、全てレンガ造りというすごさ。万里の長城は、日本列島の約2倍の長さで登れるところまで登り、それを見ると、まるで山に超巨大な龍が、はっているかのように見え、その先は霧となって消えていた。明の十三陵は、巨大な地下宮殿で、中には広い皇室がほぼ左右対称に造られていた。なんと、大理石や化石の入った石をおしみなくふんだんに使っていた。この三つの建造物に共通する点は皇帝が建てたということであり、皇帝の権力の強さを思い知らされるものであった。

日本との相違点は、小さな視点から見れば、照明のスイッチは下をおせばつくことや、車が右側通行である。しかし、もっと大きな視点から見た場合、何とも形容しがたい「エネルギー」というものを、感じた。朝のラッシュアワー時の自転車の洪水、露店商売の店先からあふれる人々の会話、みやげ物を売りつけようとする商売人のパワー、あらゆるところで巨大中国をかい間見た気がする。

南昌第三中学校では熱烈歓迎をうけた。とてもレベルの高い学校で、英語の発音がきれいだった。交流会では、民族の伝統芸能のような出し物から歌謡曲まで全てプロ並みであった。僕たちのS.M.A.Pの踊りは、楽しくできたし、笑いがとれたので、よかったことにしよう。



ホームステイ先の左元昕君と
友好会館にて

ホームステイでは左さんという一家にさせてもらった。そこには、高一の息子「元昕」君がいた。元昕君は、パソコンが好きで、ゲームをして遊んだ。僕はパソコンのことは、よく知っているので話が合った。そして、自分の家族を紹介したり、日本の様子などを話した。元昕君のお父さんは、日本に住んでいたこともある、日本通なので、僕はとても助かった。左さん一家は、とても、親切な人たちで、次の日の朝別れるのが、とてもつらかった。

僕がこの旅行で得た物は数知れないと思う。その中でも人と人との交流であろう。中国に知人もできたし、24人の素晴らしい先生方、友達ともめぐり合えた。この旅行で築きあげた友情の輪が今回限りでくずれるのではなく、さらに深く、そして今後さらに発展できるように努力したい。



自分を見つけた8日間

高松市立太田中学校

仙波幸恵

4月1日の夕方、長かったような短かったような8日間の日程を終え、広大な中国から高松へ帰ってきました。私にとってこの8日間は一生心に刻みこまれているでしょう。まあ、日程を終えたので言える言葉ですが、出発前は不安と緊張で大変でした。

3月25日、家族や先生方に見送られ高松を出発しました。北京に到着した時は「中国だなぁ」と思っ
てすごくうれしかったのを覚えています。翌日から北京の見学が始まりました。万里の長城、天安門広
場、故宮などを見学するにつれて「中国に来た!」という実感が湧いてきました。北京見学の中で、一
番心に残っているのは万里の長城見学です。去年は、とても寒かったと聞いていたのでかなり厚着をし
ていきました。ところが、すごく天気が良く、汗が出るほどでした。私たちは、女坂を登りました。登
る前は、部活で鍛えた体力ですぐ登れるだろうと思っていました。けれども、実際に登ってみると、斜
めになっている坂やすごく急な階段と大きな障害物がたくさんあって、最後の方は足が棒みたいになっ
てしまいました。しかし、最後まで登りきるとそれまで苦労したものが全部吹き飛んでしまうほどすば
らしい景色が見えました。私は、万里の長城に立っている時、自分が中国に来ていることを夢のように
思いました。万里の長城は、テレビでしか見たことがなかったので初めて自分の目で見たときの感動は、



邱薇さんと家族と

言葉では言い表わせないほどすばらしいものでした。

さて、4日、5日目は南昌見学です。ここでは出発す
る前からとても楽しみにしていたホームステイがありま
した。私は2才年下の邱薇さんの家にお世話になりました。
邱薇さんの父親は日本語を話せたので言葉には不自
由なく過ごすことができました。「お風呂に入りますか?」
と聞かれたので「はい」と答えるとお風呂に案内してく
れました。髪を洗って出てくると「ここに座って」と言
われたので座ると私の髪を丁寧に乾かしてくれました。

私が「謝謝」と言うのにっこり笑ってくれました。夜、寝る時には風邪をひくからと言って布を持って
きてくれました。私は何も役に立つことをしていないのに邱薇さんや家族の方々の私に対する親切には
言葉では言い表わせないほど感謝しています。本当にありがとうございました。

ご迷惑ばかりかけましたが、このようなすばらしい機会を与えてくださった高松市国際交流協会の方々、
学校の先生方そして両親にお礼を言いたいです。私は、中国に行っ
て今までと違う新しい自分を見つ
てきたと思います。

最後に、私といっしょにすばらしい8日間を過ごしてくれた仲間、どうもありがとう。



中国の活気とパワーを日本にも!!

高松市立古高松中学校

中 村 仁

僕にとっての中国は、日本と同じアジアの文化を持つ、となりの大国。古い昔から交流があり、生活も、考え方も、あまり変わらないだろうと考えていた。でも、北京に着いたとたん、大きなショックを感じた。日本とあらゆることが違って、おどろきの連続だった。そして、ぼくの中国に対する見方がずいぶん変わってきた。

まず、おどろいたことの一歩めは、中国の人たちのパワーだ。北京、南昌、上海、どの都市にもあった「建築ラッシュ」。これは、中国がものすごい発展をする予兆のような気がしてならなかった。それに、あらゆる所で聞こえてきた自動車のクラクションの嵐は、中国を、今、発展させている人たちの、みなぎりすぎてまだあり余っているパワーを感じさせられた。

2番めに、中国の人は古い文化を大切に思う。日本で、着物を着て、日本舞踊を踊ったりする若い人は、今はほとんどいない。

でも、中国では、若い人でもたくさんの所で民族衣装を着て踊っていた。少年宮でも、中国の古い踊りを小さいころから教えていた。

そして3番め、学校やホームステイ先でとても大歓迎されたことだ。学校では、手に花をもって、まわりを卒業式の花道のように囲まれて迎えられた。踊りや歌などもたくさん見せてくれて、うれしかった。

ホームステイ先では、黄くんの一家がこれまた大歓迎してくれた。ぼくは、黄くんの家に入ったとき、きらきら光っているスリッパをはかせてくれ、大きなソファーにすわらせてくれた。果物もたくさん用意してくれていた。また、黄くんはおとなしい人だったけれども、ぼくの未熟な英語を、一生懸命に聞いてくれた。わずか一日だけのホームステイだったが、別れるのはとてもつらかった。

この旅を通して、日本がこのままではいけないんじゃないのか、このままでは中国にあらゆる面で負けてしまうんじゃないか、と思う。中国は、今、その活気とパワーに満ちあふれ、どんどん発展している。古い文化を大切に。おまけに人々は優しい。日本はどうだろうか。いじめを苦に自殺する人がいる。政治家の汚職事件が後をたたない。薬害エイズ問題は責任をなすり合う。それに、日本の伝統文化を受け継ぐ人はとても少なくなっている。

ぼくらは、中国に負けちゃいけない。あの満ちあふれていた活気とパワーを、日本に起こさせなければならぬと思う。

最後に、今回すばらしい機会をくださり、助けていただいたたくさんの方々や仲よくなった友だちに感謝したい。ありがとうございました。



中日友好会館にて南昌市の中学生と



私の学んだこと

高松市立古高松中学校

松岡 恵美

今回の旅は私にとって+（プラス）になる事ばかりでした。数えきれないぐらいの知識と人の優しさ、友だちの大切さを教えてくれたのです。

中国は歴史そのものだと思ったのが一番最初です。天安門、故宮、明の十三陵、どれをとっても、中国の奥深さと雄大さを感じられました。建築物もよかったけれど、それ以上に中国の方とお話できた事が一番心に残っています。私の下手な英語を一生けん命理解しようとしてくれて、とてもうれしかったし、私自身も改めて勉強不足を身にしみて感じたので、もっと勉強しなくてはと思いました。

そのことを特に感じたのがホームステイでした。第三中学訪問の時は、友達2・3人で行動していても聞き方とか分からない事があれば相談できたけど、ホームステイでは1人です。辞典を片手に筆談したり、お互いの事を教えあったりしました。不思議なもので、自分でも何を言っているのか分からなかったけど、とにかく「話したい」という気持ちで会話が自然にできていたのです。英語で、しかも中国の方とお話しするのがこんなに楽しいなんて、思わなかった分以上にうれしかったです。私の気持ちとは全く関係なく無情にも時間は過ぎてしまい、別れの時です。今までつらいとか悲しいとか考えたり思ったりしなかったのに、バスに乗るとすごくつらくなって、涙が出そうになり、必死に笑顔で手を振りました。泣いてもあの時は良かったのかもしれません。でも、私としては笑顔で別れたかったのです。

長いようで短かった中国の旅も終わりました。けれども日本にいる今でも、中国の一瞬一瞬が目に焼きついています。この感動を私一人だけのものにしないでみんなに伝えたいと思います。100分の1、いや1000分の1だけでも伝えられたらなと思います。最後に、お世話になった中国の方々、日本でいろいろ支えてくださった高松市国際交流協会・国際交流課の皆様、中国行きを推薦していただいた学校の先生方、そして何よりも影ながら私の無事を祈ってくださった家族と友に多大なる感謝をいたします。謝謝。



ホームステイ先の友人と



謝 謝

高松市立木太中学校

松 下 弥 生

3月25日、私達はついに中国へ旅立ちました。あの、驚きと感動でいっぱいだった8日間は、今でもどの場面でも鮮明に思い出すことができます。

中国ではたくさんの観光をしました、中でも特に気に入ったのは、「万里の長城」です。

月から見える唯一の建造物ということで、その写真を見た時からずっとあこがれていました。実際に目で見て、この足で歩いてみて初めて「中国へ来たんだ。」と実感し、その景色のすばらしさは、どう言えばいいのでしょうか、もうとにかく広いのです。長いのです。あんなに広大なすばらしい風景は日本では絶対見られないでしょう。

そんな初日が過ぎ、あっという間に4日がたちました。いよいよ、まちにまったホームステイの日。

このホームステイは、前日の夕食会の時、急に決まったそうです。一時はあきらめていた夢でしたが、友好会館館長の張さんが第三中学校の校長先生や市長さんに頼んで頼んで頼んでくださり、予定よりは短いホームステイをすることができるようになりました。一時はあきらめていた夢だけに喜びもひとしおで、それを聞いた時はもう団員のみんなと手をたたいて声をあげて喜びました。

「英語話せるかなあ。どんな子なんだろう。あいさつは中国語でしょう。」と期待と不安で頭の中がいっぱいそのままその次の日を過ごし、そしていよいよ明娜ちゃんという女の子の家に泊まることになりました。年上の楊姪という子が遊びに来ていて、日本の事を話したり、持っていった写真を見せたり、指ずもうや去年好評だったという福笑いなどをして遊びました。福笑いはおすすめてです。すっごくおもしろくて、できあがった顔を見て3人で笑い転げていました。会話は、思っていた通り辞書に頼りっぱなしでしたが、しかし、それでもいいと思いました。だって、ゲームをして笑い転げただけでも、心は通じ合えたと思うからです。

別れる時はさすがにつらかったです。友好会館に帰ってきて、集合のぎりぎりまで3人で写真を撮ったりお話していました。でも、もういよいよバスに乗る時。たった何時間かをいっしょに過ごした仲間なのに、これでもう会えないのかと思うと胸がいっぱいで…。でも、元気よく手を振って、笑って「再見、謝謝。」といい、心の中では「また絶対くるから。」と何回も繰り返しました。私の中国での目標、「友だちをつくる。」は、ばっちり果たせました。だって別れがあんなにつらかったから。

このすばらしい中国の旅へ行くことができ、言葉のハンデはあっても、国が違って心はしっかりと通じるものだと改めて実感でき、日本から世界へ視野も広がりました。将来、この体験を生かし国際交流がもっと盛んになるよう、少しでも役立てればいいと思います。

最後に、団長先生、引率の先生方、中国で親切にしてくださいました。たくさんの方々、どうもありがとうございました。

そして、20人の仲間、ありがとう。本当にこんなに楽しい旅になるとは思ってもみませんでした。それもこれもみんな、先生方の苦勞、たくさんの方の深い愛、20人の仲間の協力があったからこそだと気づかされ、本当に心から感謝しています。謝謝。



ホームステイ先の王明娜ちゃんと



初めての海外旅行

香川大学教育学部附属高松中学校

矢島 果那

夢から覚めたとき、短い時間の中にたくさんの事が凝縮されてつまっていたような感じをおぼえたことはありませんか？今回の中国への旅行は、後から振り返るとまるで夢のような8日間でした。

中国は、私が思っていたよりもずっと広大で、人々のパワーに圧倒されっぱなしでした。バスの中から、テレビでしか見たことのなかった北京の朝の自転車ラッシュを目にしたとき、「ああ、私は今中国にいるんだ。」と、強く実感したのを覚えています。どこへ行っても、とにかく人だらけの国でした。

一番心に残っているのは、やはり南昌市でのホームステイです。南昌に着いた日、ホテルで「今年はホームステイがない」と知らされたときには、目の前が真っ暗になりそうでした。しかし、たくさんの人たちの努力のおかげで、後から1泊だけ行えることになりました。あきらめきれいでいなかっただけにとてもうれしく、できると決まったときは団員のみんなと歓声をあげて喜びました。

私は、喻苗という15歳の女の子の家にお世話になりました。彼女の家は見ためはきれいとは言えないビル（アパート）なのに、中に入るときれいで、驚きました。テレビやビデオデッキなども、私の家にあるものより立派だったように思います。中国は一人っ子政策をとっていると聞いていたのに、彼女には5歳と7歳の妹がいて、私が入るとすぐ、小さな花をプレゼントしてくれました。2人はいつもにこにこしていて、とてもかわいかったです。家族から歓迎を受けた後、喻苗がピアノを弾いてくれました。私もピアノは好きですが弾く自信はなく、Let's try!と言われてたけれど断ってしまいました。きちんと練習していけばよかったと、今でも後悔しています。でもピアノのかわりに、「ふるさと」や「花」など、日本の歌をたくさん歌いました。喻苗のおじさんと、おばさん2人が来ていて、注目されたので、張り切って10曲くらい歌ったと思います。交流会でも歌った「花」は有名な曲らしく、みんなからアンコールされてとても幸せな気持ちになりました。

家にはカラオケの機械もあり、おばさんたちを中心に盛り上がりました。日本の歌がなかったため私は歌えなかったけれど、画面に出る歌詞は漢字なので意味は何となく分かりました。おばさんたちの好きな歌は、ほとんどが毛沢東や国家をたたえるもので、日本人と中国人は容姿はよく似ているけれど、中身はやはり全く違うのだと感じました。

カラオケの後、妹たちがかわいい踊りをしてくれて、私も高松踊りを踊りました。また、アルバムを見せあったり、学校のことについて話したり、遅くまで素晴らしい時間を過ごしました。私にも弟が3人いるので、喻苗とは姉としての気持ちで通じ合うものがあったような気がします。しかし、彼女の方がずっと面倒見がよく、見習わなければ、と思いました。彼女と一緒にいた時間は睡眠時間を含めて13時間程度しかありませんでしたが、いい友達になることができたと思います。これからも文通を続け、またいつか会いたいです。家族の方々にも、大変お世話になりました。

私はこの使節団に選ばれたことを心からうれしく思います。中国での経験を生かして、自分からたくさんのことに挑戦していきたいです。このような素晴らしい機会を与えてくださった関係者の皆様、お世話になった先生方、本当にありがとうございます。また、8日間行動を共にした20名の団員のみんな、言葉では言い表せないほどの楽しい思い出をありがとうございます。再見！



天安門広場にて

